資料４

第１回　緑整備部会　議事概要抜粋

○日時　　平成２６年６月１３日（金）　１０：００～１２：００

○場所　　ホテルラフォーレ新大阪　１９階　ヨーク

○議題　（１）「万博記念公園将来ビジョン（仮称）」について

（２）今後のスケジュールについて

○出席委員等　　石川部会長、篠﨑委員（５０音順）

尼﨑専門委員、甲谷専門委員、養父専門委員、山本専門委員（５０音順）

○内容

# （１）「万博記念公園将来ビジョン（仮称）」について

## 【森の将来像について】

・目標像が見えない。明治神宮や皇居の森など人工の森づくりには目的が存在、皇居の森は水田・畑があり四季の花が咲くような武蔵野の雑木林が目標、マレーシアの森林センターでは、熱帯雨林にもどすことが目的。

目的性がない森づくりはできないため、将来の目標像を見えるようにしておく必要がある。

・目標像には、生きものの多様性と資源循環という人と森との関わりの中で森づくりがなされ、ライフスタイルの変化を踏まえ、ＮＰＯやボランティアの方が森林育成の取組みに加わり、その結果育成される快適な森の空間を高齢者や障がい者を含めた多様な人々が享受していくというサイクルが考えられる。

・計画当初の、人が手を入れなくても成り立つという意味の「自立した森」は、今の公園の運営や管理・使い方を考えたときには難しい。人手を加えつつコントロールする「自律」という形での森づくりはあるかと考える。

・空間的に独立した森ではなく、周辺施設や住宅地と連続する森という考え方があってもよいのではないか。

・これからの高齢化社会を考えると、入口の問題、周辺との緑の連続性について、利用者のアクセスを踏まえて開いていく森も必要ではないか。「採算をとるという意味での自立」「緑としての地域や広域への連続性・ネットワーク」「利用者のアクセス」という３つの視点で目標像を考えていただきたい。

・１９７０年につくられた万博の森を利用者の利便向上、地域に開かれた森など時代の要請を受けながら、何をめざしていくのか議論していく。

## 【日本庭園の将来像について】

・外国の方が日本庭園を見るなら京都に行く。万博では日本庭園を見る気がなかった人が、公園を奥へ進んでいって「大阪にこんな日本庭園がある」と発見し、大阪の近代の日本庭園の素晴しさを体感してもらう。理屈では無く、世界の人が感動できる空間とすることが必要。

世界の人が感動できる空間は日本庭園。日本庭園をしっかりと捉える必要がある。

・日本庭園は千年以上の歴史のなかで時代の要請により変化してきたため、近代の万博仕様の日本庭園の姿を見せることが必要。入口から日本庭園に至るアプローチも含めて検討するべき。

・日本庭園は昔から、園遊会などの交流・社交の場として使われてきた自由な空間であった。自由に使い方を発想すべき。

・アジアの方々のニーズを踏まえ、万博で日本の何を見ていただくか、何を体験いただくか議論すべき。

・南側ゾーンや駅前周辺地区など、公園の各場所との機能分担を踏まえながら、日本庭園の観光を考えることも必要。賑わう場所と休息できる場所の差をつくることも重要。

・外国から来る方に「何を見せ、何を利用いただくのか」議論していく。